

サッカーのワールドカップ・ブランジル大会が開幕し、日本代表チームの試合をハラハラ・ドキドキしながら観戦している人は多いでしょう。来週は対コロンビア戦です。

「こころ編集室から」

ぜひ頑張ってもらいたいものであります。今週からの「ふるさと再訪」この舞台はかつて私も取材で訪れたことがあります。松岡記者も張り切っています。ご期待下さい。(威)

活動は「炭焼きマイスター」の育成。里山で集めた木の枝約50kgをドラム缶に入れ、焚き口として開けた穴に小枝を詰めて焼く。別につけた煙突から蒸氣ができるが、1時間ほどで火を消し3時間余り置く。すると、約10kgの炭ができるそうだ。

昨年秋から始めた試みで、これまでに社会人のほか、関

(大阪市、松村賢治理事長、71)だ。

「なぜおうちの中に砂場があるの」。初めて囲炉裏を見た子供の声という。私たちの生活から炭火が消えて久しい。しかし「火を安全に扱うことは生活の基本」。そんな考え方から、炭の焼き方や炭火の扱い方を若者に学んでもらおうと活動する団体がある。

一般社団法人・南太平洋協会

イラスト・平野 恵理子

西地区の大学生ら約30人が体験。「皆珍しがり、竹や桜、ヒノキなど様々な材料で試している。大津市の琵琶湖のそばに住む主婦らは、天候が荒れたときに流れ着く流木で炭

焼きをするまでになった」

背景には阪神大震災や東日本大震災の教訓がある。阪神大震災では、松村さんも被災し自宅が全壊。避難先の小学校でボランティア活動を続ける中で七輪など「ローテク」の力を見直した。「自分で火を扱えれば生きられる。それは人間力の再生にもつながる。なのに今の若者はその経験がない」と痛感したという。

松村さんは建築家でヨットマン。ドラム缶による炭焼きは、以前から交流があるパプアニューギニアで3年前に実施。燃料不足に悩む現地の人々に、流木やヤシの実の殻で炭をつくる方法を伝授した。国際親善にも役立っている。

この試みを会社組織で広げ

る構想も温めている。社名は

「ビソアミス」。逆に読むと

「炭遊び」。遊び心ものぞく。

ご意見、ご感想をお寄せください。〒 100-8065日本経済新聞「こころページ」編集室、電子メールkokoro@nex.nikkei.co.jp

「炭遊び」で火の扱い伝授



うたた寝

ミヤマエンレイソウ
(深山延齡草) ユリ科
の多年草。茎の先の3枚
の葉の中心に白い花を咲
かす。